

令和5（2023）年度グローバルプロジェクト推進公募採択一覧

■区分A（1件あたり50万円を上限）

No	プロジェクト名	プロジェクト代表者	プロジェクト概要
1	榎本石峽の改良と商品化検証 - 化学・歴史学・商学による文理融合研究 -	一般教育系 教授 沼田 ゆかり	本プロジェクトでは榎本武揚が書き残した「石峽製造法」および榎本の兄が創設した江水舎が開発した石峽をもとに開発した復刻版・リニューアル版榎本石峽を改良し、商品化へ向けて使用感等に関するアンケート調査を実施する。榎本武揚は、小樽における不在地主として当市の発展に大きく貢献したことで知られるが、本学前身である高商を誘致する際に寄付活動を先導するなど本学とも深い関わりがある。昨年度のプロジェクトでは「石峽製造法」を読解し復刻した成果をもとに、復刻版とリニューアル版榎本石峽を委託製造したが、商品化には製造に関する課題が残っている。本プロジェクトは、榎本の化学者の特性を歴史学と化学の双方から分析する学際的な研究成果の一部をマーケティングの専門知識により地域活性化のために活かそうとするものであり、本学の中長期ビジョン2030に資する。
2	ニューロダイバーシティ・Web3.0時代における生業づくりエコシステム形成プロジェクト	アントレプレナーシップ専攻 准教授 藤原 健祐	本プロジェクトでは、人口減少・少子高齢化による地域経済の縮小という課題に対し、北海道済生会、株式会社日本総合研究所と連携し、地域活性化の課題解決にアプローチする新たな価値創出のモデルとして、ニューロダイバーシティ・Web3.0時代における多様な人々の生業づくりエコシステムの形成を目指す。今年度は、ニューロダイバーシティの多様な個性が活かされた就労や自己肯定感の向上をもたらす要素を検証すべく、Phase1として実証実験を行う。具体的には、発達支援施設において、主に障がいを持っている中高生を対象として、デジタルアート制作ワークショップ等の教育プログラムを行い、アンケートおよびインタビューを通じて自己肯定感への影響に関する効果測定を行う。合わせて、こうした教育プログラムに必要な支援体制や機材を検証する。一連の取り組みは、D&I (Diversity & Inclusion) を促進する新しいアプローチや方法論の開発につながる事が期待される。

■区分B（1件あたり25万円を上限）

1	北海道の侵略的外来植物が植食者に対する抵抗性を獲得するメカニズムの解明	一般教育系 准教授 片山 昇	本研究の目的は、持続可能な社会の実現に向けた外来生物管理の新たな視点を提供するため「侵略的外来植物が侵入地で抵抗性を獲得するメカニズムを解明すること」である。そのために、約100年前にアメリカから日本に侵入して以降、数々の日本固有の植物の脅威となっているセイタカアワダチソウとその植食者の外来昆虫(アワダチソウグンバイ)を対象とし、侵入地で外来植物が外来昆虫に対して抵抗性を変化させる過程を野外実験で再現し、そのメカニズムを解析する。本課題では、アワダチソウグンバイが未定着の北海道のセイタカアワダチソウの反応を調べることで本種が抵抗性を獲得した原因を探索するとともに、今後北海道で起こりうる現象を事前に予測する。このような取り組みにより、本公募が掲げる「地域課題解決型プロジェクト（地域再生）」を実現する。
2	小樽から世界へー国際法模擬裁判JAPANCUPへの挑戦	企業法学科 准教授 張 博一	本プロジェクトは、国際法模擬裁判の日本大会であるJAPANCUPへの参加を通して、国際法に関するアクティブラーニングを促すことを目的とする。国際法模擬裁判は、架空の国際紛争事案について、参加チームが書面陳述及び口頭陳述を行い、その勝敗を競うものである。日本では、法学教育は講義が中心となっているが、模擬裁判は大学で学んでいる法律が、実践の場においてどのように活用されているのかを学生が実体験から学び、小樽からグローバルな視点を持つ人材を育てるうえで重要な教育手法である。本年度の問題文が国家の主権免除に関するものであり、日本が抱える戦後賠償をめぐる議論について学生が考える最適な素材である。本プロジェクトは、中期目標「国や社会、それを取り巻く国際社会の変化に応じて、求められる人材を育成するため、柔軟かつ機動的に教育プログラム」に対応したものである。
3	「ソーシャルインパクトボンド*を活用した運動習慣が無い中高年層を対象とする健康増進プログラム」の事業成果評価手法の実証分析	社会情報学科 教授 大津 晶	本取組は帯広畜産大学発のNPO法人「ちくたいKIP」が中札内村にて実施を計画している「ソーシャルインパクトボンドを活用した運動無関心中高年向けの健康増進プログラムの普及」において、「地域住民のニーズ/インサイト調査に基づく参加動機向上のための行動経済学的手法」ならびに「同プログラムの多面的な直接的/間接的社会インパクト評価手法」の開発を目指す異分野融合研究であり、加えて、幅広いステークホルダーや異分野の学生と協働して実現するウェルビーイングなまちづくり活動への参画を通じた本学学生の地域課題解決型実践教育を展開するものです。
4	小樽の地域資源としてのフェリー航路の大学生向け利活用のための取組：北信越の海運関連企業のインターンシップ企画に注目して	企業法学科 教授 小林友彦	小樽港は、小樽の物流と観光の起点としての素地を備えている。しかしながら、フェリー航路の旅客事業は、特に若年層にとっては認知度や利用頻度が小さいままである。本プロジェクトは、アクティブラーニングの形でこの課題に取り組む（教育ビジョン2030）。大学生によるフェリーの旅客利用の促進するため（社会貢献ビジョン2030）、むしろ「移動時間がかかることを長所に転換する」ことに着目する。具体的には、大学生によるフェリーの旅客利用の新たな形態として、企業インターンシップにフェリー移動を組み込む形で実施することのフィージビリティを分析する。将来的には、フェリー航路の寄港地のそれぞれに裨益するような地域貢献効果が期待される。
5	旭川家具産業集積における新規創業企業の成長とその意義	商学科 教授 林 松国	日本五大家具産業集積の一つである旭川家具産業集積に新規創業が比較的多くみられる。それについて、大貝（2010）ではアンケート調査に基づき1990年代の新規創業が多く、また2000年代に入ってもその傾向が続いているという。また、田中（2010）と関（2010）は新規創業の事例を取り上げ、母体企業との関係や独立後の取引先の開拓といった点に焦点をあてて、産業集積における新規創業企業の起業できる環境や遠隔地市場とのつながり方を明らかにした。本プロジェクトは先行研究の成果を活かしつつ、2000年代以降に創業した企業に絞って、主に創業後の成長プロセスを詳細に分析することで、経営活動がどのように維持され、さらに新たな価値がどのように創出されたかを明らかにしていく。そのためには、取引関係や外的環境的な要因分析だけでなく、企業経営活動そのものにより踏み込んだ分析が必要であり、また時系列的に創業後の推移と成長のポイントを具体的に把握する必要があると考える。
6	ソーシャルメディア時代における「道の駅」観光情報発信機能の強化	グローバル戦略推進センター 学術研究員 大湊 亮輔	本学とニセコ町は2023年より包括連携協定を締結している。そのニセコ町観光において強力な集客コンテンツの1つに道の駅がある。過去実施したNTT東日本社との共同研究「ニセコ町訪問客の人流解析」においても半数ほどの観光客が道の駅を訪れていることが明らかになっている。この道の駅は、施設の老朽化や冬季利用可能スペースが限定的などを改善し機能向上を高めるため2025年むけて段階的な改装を予定している。道の駅は「休憩」「地域連携」「情報発信」の3つの主要機能を軸に加えて、近年「防災機能」や「地域産業振興」が強く意識されるようになっており、ニセコ町でもJRが将来的に廃止されることを踏まえ、ニセコ町内への経済波及効果や情報発信機能の強化が一層求められる。コロナ禍も終わりインバウンドが再び戻ってきてつつあるニセコ町において、町内産業界との連携を深めていくためにも、今後のニセコ町道の駅の在り方、特にソーシャルメディアなどオンライン情報発信主流の時代において道の駅の情報発信機能を強化策を調査する
7	榎本武揚と小樽商科大学の関わりを紐解くー附属図書館史料展示室再編に向けた本校史の再構築ー	一般教育系 准教授 龍馬 龍馬	本研究は、小樽の市街開発に貢献した榎本武揚と小樽商科大学の関わりに着目し、高等商業学校誘致に果たしたその役割を新たに紐解くとともに、科学史家の加茂儀一第二代学長に始まり現在に至る榎本研究の伝統を整理し、それを本校史の中に位置づけることを目指す。これにより、小樽商科大学における地域研究及び文理融合研究の進展をさらに促進する機会とするのみならず、これまでの研究成果を附属図書館に展示することを通じて、一般にも広くその成果を可視的に発信する。その過程においては、学内における教職員間の協働作業に加え、学外からも協力を得ることにより目標実現を目指す。
8	テキスト読み上げ音声合成のキャラクター「小春六花」を用いた小樽観光案内に関する調査	社会情報学科 教授 木村 泰知	本プロジェクトでは、音声合成のキャラクター「小春六花」を用いた小樽観光案内に関する調査を行う。本プロジェクトは、中長期ビジョン2030 研究ビジョンにおける地域課題解決型研究地域に関連しており、観光（インバウンド）の問題を解決することを目指している。申請者は、小樽商科大学をモデルにした架空の高校「小樽湖風高校」に通う設定である「小春六花」を通して、イラストコンテンツやラジオドラマのコンテンツに協力しつつ、小樽観光を対象にした地域課題解決型の研究を進めてきた。本プロジェクトでは、2023年9月に開催されるスタンプラリーに合わせて小樽観光案内システムを作成することで、地域課題解決型の研究をさらに進める。具体的には、9月のアニメパーティーに合わせて開催されるスタンプラリーにおいて、ChatGPTを活用した小春六花による小樽観光案内システムを運河プラザに設置して、観光者の動向を調査する。